

人権作文コンテスト

千葉大会最優秀賞

神崎中2年 小塩 翼

法務省と全国人権擁護委員連合会主催の第35回全国中学生人権作文コンテスト千葉大会において、神崎中学校2年小塩翼くんが最優秀賞を受賞し、さらに全国大会にて奨励賞を受賞したので紹介します。

「知る」ことから始めよう

神崎町立神崎中学校二年 小塩 翼



「人権」について考えた時、以前、母から聞いた話をふと思い出しました。母の友達に自閉症のお子さんを持つ方がおり、その方が「特別支援って言葉必要なのかな？私の子

が学ぶことは、特別なことなのかな？」と言っていた話を……。弱い立場の人を思いやる事、助ける事、これらは当たり前の事であるはずなのに、それが相手の受け取り方で全くそうではなくなってしまう。逆に傷つけてしまったり、不快な思いをさせてしまったりすることもあるのではないだろうか？「障害があるから」「不自由だから」「かわいそうだから」とつい自分の視点、物差しで考えてしまい無意識のうちに偏見の目で見たり、差別をしているのではないだろうか？そう言えば、そう考えさせられる様な体験を以前したことがあります。

それは、僕が小学校低学年の頃のことです。家族と食事に行った時、食事を終え店を出た僕達と入れ

違いに、一台の車が駐車場に入ってきました。車から降りてきた男の人を見て僕はその姿から目が離せなくなりました。何故なら、その人は両腕で体を支え、両足を引きずりながら慣れた様子で自ら車イスを取り出し、さっと車イスに座ったからです。そのレストランには、スロープがあり車イスで店の入り口までスムーズに辿り着きました。ただ扉は開け辛そうだなと思いながら見ていたら、母が、「何かお手伝いすることはありますか？」と聞きました。すると、「大丈夫です。」と、その人は笑顔で答え、自らドアを開け店内に入っていました。僕は、ドアを開けてあげればよかったかなと思いましたが、その時は何も出来ませんでした。車に戻ると母が、「私達から見れば不自由そうに見えても、その人にしてみれば日常のことです。私達がよかれと思ってやったことが、かえって相手にはやりにくくなってしまうこともあるから、まずは相手に聞いてみるといいんだよ。」と言いました。その数年後、法事でお寺を訪れた際、杖について、階段を降りている老人に肩を貸しました。僕が相手の片腕を支えると、「そのやり方じゃ、私は歩きにくいんだよ。逆に私が君の腕に手を置いた方が力が入って歩きやすいんだよ。」と言われました。その時僕は、「そうだ！まずは聞いてみればよかったんだ。」と小さい頃の出来事を思い出したのです。まずは、相手の状況を知る、心を知る、そこから支援は始まるのではないだろうか？その大切さを、再認識した出来事でした。

人を叩いてしまう子を目の当たりにし、早く終わらないかなと思っていました。家に帰り母に話をする時、「あなたにも苦手なことがあるでしょ。それと同じだよ。その子達は、じつと話を聞いたり、思いを言葉にするのが苦手なだけだよ。」と言われました。なるほど、できることは違うかもしれないけど、出来るようになるために努力することは何ら、変わりがないだろうし、出来た時の喜びもきっと僕らと同じ。それはできる僕達が上ではなく、相手との差でもなく、苦手が得意かそういうことなのではないだろうか？それも個性ではないのだろうか？それからの交流会では、苦手意識もなくなり、「个性的な子が多いけれど僕らと変わりないんだ。何かをしてあげようと思うのではなく、一緒に楽しめばいいんだ。」と思うようになり、相手のことを考えて交流会の内容を工夫したり、具体的に考えながら積極的に参加できるようになりました。

今回の作文で「支援」という言葉を使いましたが、それは知らず知らずの内に、自分の方が上に立っているから出てきた言葉のように思えてなりません。「支援」ではなく、共に生きること。健常者、障害者の区別をつけることではなく、困っていたら声をかける、手助けをするという思いやりの心が必要なのだと思います。そして、ひとりよがりの思いにならないために、相手の障害のこと、その人自身がどのように感じているかを知ることがとても大事なことなのだと思います。偏見、差別を無くすには、僕は知ることが始めの一步だと改めて思いました。知らないからこそ生まれる不安、怖さ、それが相手との距離を広げてしまうのだと思います。僕は、小さいけれども始めの一步を踏み出せたように思います。そして、その一步を周囲にも、広げていこうと強く思いました。